

# 農山村の過疎化は都市環境を劣化させる

瀬戸昌之（日の出の森支える会代表）

日本の農山村は過疎化に向かっている。都市住民の多くはこれに関心を払っているであろうか。農山村と都市の関係を、たとえば洪水と地球温暖化を例として考えよう。

水田はコメを作っているだけではない。大雨を貯留して、下流の都市の洪水を和らげてきた。農山村が消滅すると水田も消滅し、水田に代わる洪水防止策が必要になる。この代替策として、国はたとえば春日部市に貯水量 76 万 t (トン) の地下ダム（首都圏外郭放水路）をつくり、下流の水害を防ぐとした。このダムは建設費約 2300 億円に加えて、維持管理費も必要である。ところで、多くの河川は 1 秒間に 1000t 以上流れると洪水害をおこしやすい。1000t 流れると 76 万 t の地下ダムは 11 分間で満杯になる。巨費を投じても、地下ダムに洪水防止は期待できないようだ。



いっぽう、水田の面積が  $2 \text{ km}^2$  なら、貯水量は約 60~70 万 t になる。これは上述の地下ダム 1 基の貯水量と等しい。さて、洪水防止費として水田  $2 \text{ km}^2$  へ年あたり 2 億円を補填すれば何が期待できるであろうか。その地域は活性化し、水田は維持されるだろう。なお、この 2 億円は地下ダム 1 基の建設費の 1150 分の 1 である。言いかえれば、地下ダム 1 基の建設費で、1150 倍の洪水防止ができることも意味する。洪水防止は、地下ダムより、水田の活用の方がはるかに少ない費用で多くの効果が期待できる。

つぎに、地球温暖化を考えよう。 $\text{CO}_2$ （二酸化炭素）は大気に蓄積すると温暖化を起すから、大気の  $\text{CO}_2$  を削減しなければならない。日本は「京都議定書」で大気への  $\text{CO}_2$  排出を C (炭素) 量で毎年約 2060 万 t を削減するとした。このうち、日本の森林は大気の  $\text{CO}_2$  を C (炭素) 量で毎年約 1350 万 t 削減して、京都議定書の約束の 7 割を達成してきたとしている。残りの約 700 万 t はチェコやポーランドなどの  $\text{CO}_2$  の排出権を購入して、議定書を達成してきたとしている。

しかしながら、森林は、「成熟」すると、 $\text{CO}_2$  の吸収と排出が等しくなる。このとき森林は大気の  $\text{CO}_2$  を削減しなくなり、議定書の達成は困難になる。ではどうすれば良いか。

成熟した森林を「間伐」して「若く」すればよい。若くすれば森林は大気の  $\text{CO}_2$  を削減し続ける。間伐で議定書の 7 割の 1350 万 t の削減が継続できる。

なお、議定書の残りの 3 割も、排出権の購入のまやかしでなく、以下のように削減できる。すなわち、間伐で得られた材は建築物や家具などの恒久材にしよう。恒久材として保存すれば大気の  $\text{CO}_2$  を削減しつづける。恒久材になりにくい

間伐材は炭の粉、炭粉、にして土壤に散布しよう。炭粉は土壤中でもずっと炭粉のままで、CO<sub>2</sub>にならない。したがって、カーボンニュートラルをこえて温暖化を阻止する。落枝落葉も林床でやがてCO<sub>2</sub>になるから、炭粉にして土壤に散布しよう。また、使命を終えた恒久材も炭の粉にすれば大気のCO<sub>2</sub>を削減しつづける。恒久材としての保存と落枝落葉の炭粉の散布で残りの3割の約700万tの削減は持続できる。

間伐、炭粉散布を実施するために、農山村に経済的インセンティブが必要である。これに年あたり約6千億円の地球温暖化対策税を使おう。たとえば、エコカーへは、CO<sub>2</sub>の排出を「抑制」するとして、C量で1tのCO<sub>2</sub>抑制あたり約7万円も補填している。これをよしとするなら、間伐、炭粉散布による1tのCO<sub>2</sub>削減にはエコカー以上に補填しよう。間伐、炭粉散布はエコカーよりはるかに温暖化を防止するからである。

農林業が生みだす洪水防止や温暖化阻止などの公益的価値は都市の環境を支えてきた。この恩恵を享受しながら、都市住民は農山村の過疎化に無関心でいるわけにはゆくまい。都市住民は農山村と持続的な未来社会を共有するために、農山村の活性化を図ろうではないか。このとき農山村へ公正な経済的インセンティブの提供が必要なのである。

## 新型コロナウイルスにまつわる話

宮入容子

この原稿を依頼されたのが、3月27日だった。その数日前、別の用件で「支える会」の濱田光一さんと電話で話した折、『けせらん・ぱさらん』の印刷を延期した話をしたのだ。

「2月下旬に発行を予定していたが、不要不急と言われる中、たとえ印刷ができる、公共施設に配布したとしても読み手に渡ることは難しいのでは、と判断したが、結局公共施設は3月2日から閉館になった」。また、「こうした新型コロナウイルスによる自粛の嵐にあらゆる活動が委縮してしまうとしたらそれも心配（と話したら、濱田さんは「大丈夫！活動が委縮することはない！」ときっぱり）。

『けせらん』を出せなかったのは過去に一度、2011年3月11日の東日本大震災後にあった。と、そうした話を異常事態のコロナ禍を背景に書くことになった。

2011年は、当初用意した原稿を1か月後にそのまま印刷。編集後記には「刻々と報道される被災地の様子、原発の放射能漏れ、計画停電や物資不足と先行きの見えない不安が漂っている。こうした状況下で出していいのか…でも出すことに決めた。どんな状況であれ、伝えたいことがあり、読んでくれる人もいるはず、それにまだ出せる状況だから」と書いている。

だが、今回は発行できるのか見当もつかない。中国・武漢から広がった、新型コロナウイルスによる肺炎は、瞬く間に世界中に感染拡大している。現に今、日本は5月6日までの「緊急事態宣言」の真っただ中、私の暮らす多摩市も4月20日現在、感染者が19人と報告されている。

また、メディアは、コロナ禍の言語集団、「クラスター」「三密」「PCR検査」「パンデミック」「オーバーシュート」「人工心肺装置・エクモ」etc.を頻繁に使い、人々の不安に拍車をかける。

さて、「ソーシャルディスタンス」が言われ始めた頃だった。買い物に行く途中で、Sさんと数年ぶりにはなったり会った。お互いの同学年の息子が中学生だった頃、PTA活動を共にして、その後もお互いの活動の理解者として、何かと話し合える仲である。道幅、約3mを挟んで立ち、「久し振り～」から話が始まった（のだが、話が尽きず、地場の野菜を売るお店まで歩きながら話そうということに。二人の間に1m間隔は取りました）。

近況報告で、Sさんは、この春新しく始まる平和に関する学習会が延期になり「準備を重ねて始まろうとしていたので、とても残念」。また、以前から私が発行している『けせらん・ばさらん』の愛読者と言ってくれている彼女。「今年は見てないけど」と言うので、前述の話をした。過去に遡って、「中学で役員をしていた時、学校の焼却炉で、ダイオキシンが発生するプラスチックを燃やさないで欲しいと文書を提出して、教頭先生に〈圧力団体のようだ〉と言われたの、覚えてる？」と私。「覚えてる、あの言葉を使う教頭先生が変だって話したよね」とSさん。「私ね、二つ目の処分場が予定されている森に行ったことがあるの。その時、絵本作家の田島征三さんの奥さんが案内してくれて…ほら、なんだか運動があったでしょ（トラスト運動？と私）そう、そのトラスト運動で処分場は出来ないと思ってたのよね」。

三輪啓さん（「支える会」の元共同代表の一人）のことを思い出した。トラストの土地は三輪さんが家族旅行をしていた町の不動産屋で偶然見つけ（これには裏があるのですが、説明は省きます）、「支える会」は「物心両面から運動を支えたい」という、三輪さんの強い思いから誕生している。Sさんとは野菜屋さんの前で別れたが、彼女といろいろ話しているうちに、三輪さんが登場してくれた。三輪さんならきっと「コロナ禍でも大事な問題を見落とさないように」と言ってくれるはず。

余談だが多摩市では、午前11時と午後5時にアナウンスを流す。不要不急、窓を開けて換気、よく眠って免疫力高める等に加え、最近は、医療従事者に心の中で拍手を送るよう呼びかけている。（以上、4月28日現在の原稿です。）

